

# 子育てに関する調査

## — 意識と実態 —

本田典子

The Investigation of the Childcare

— Consciousness and Reality —

by

Noriko Honda

### I はじめに

ここ数年、子供の「いじめ」の問題は、特殊な問題から一般的な問題としての拡がりを見せている。一面では、これを子供の精神的な弱さを指摘すると同時に、親の過保護や子育てに対する自信の無さが取り出されてもいる。

多様化する家族のあり方は、子育てそのものの目的は同じであっても、当然子育ての多様化を促進する状況を回避できるものではない。しかしながら、産業社会にあっては、多様化の一方に普遍的現象も見逃すわけには行かない。多様化の中の普遍的な現象は、普遍化の流れを適宜に受容しながら多様化とうまくバランスを保つことが必要になる。このバランスこそが、子育ての過程で重要な選択要件となるのである。

子育ての意識は、時代を反映して少しずつ変化をする。とはいえ、伝統的子育て観には根強いものがあり、その実態をつかみにくくさせている背景が伺える。子育てのプライベート性と社会性を同時に持つ問題の難しさともいえる。

そこで、子育ての意識と実態とのズレを出来るだけ縮小すべく項目を用意し、現在子育てがどのように行なわれているのかを示すと共に、プライベートかつ社会性の問題に対する課題に応え、よりよい子育ての道を探る一助としたい。

### II 調査目的、調査事項および調査対象者の属性

#### 1. 調査目的

子育ての意識と実態とのズレを明確にすることを、目的とする。

そのために、自己と他者の見方がどのようなものであるかを中心とするアンケート調査を実施し、数量的分析を試みた。

#### 2. 調査対象者、調査事項、調査方法

(1) 調査対象者および調査票の配布・回収状況

下記の地域の18歳以上の女性を対象とし、調査者の居住地域周辺の住民のうち調査に快諾する方だけに調査票を配布して、回収した。

対 象 地 区	配 布 ・ 回 収 数	対 象 地 区	配 布 ・ 回 収 数
新 潟 市	59	亀 田 町	30
加 茂 市	30	黒 埼 町	84
新 発 田 市	30	神 林 村	30
五 泉 市	30	*鶴 岡 市	30
田 上 町	30	計	353

\*山形県, 他は新潟県。

(2) 調 査 期 間

昭和59年8月1日～10日

(3) 調 査 事 項

子供を産み育てることの意味, 子を産むことを考えるようになった年齢, 子供の将来についての期待, 親が子に言っている大切なこと, 子供の行動に対する認識, 子供観などである。

3. 調 査 対 象 者 の 属 性

表 1 年 齢 構 成 ( )%

～ 19歳	38 (10.8)
20 ～ 24歳	67 (19.0)
25 ～ 29歳	32 (9.1)
30 ～ 34歳	49 (13.9)
35 ～ 39歳	26 (7.4)
40 ～ 44歳	37 (10.5)
45 ～ 49歳	48 (13.6)
50歳 ～	42 (11.9)
N・A	2 (0.9)
不 明	12 (3.4)
合 計	353 (100.0)

表 2 結 婚 の 有 無 ( )%

既 婚	234 (66.3)
未 婚	109 (30.9)
そ の 他	1 (0.3)
N・A	9 (2.5)
合 計	353 (100.0)

表 3 学 歴 ( )%

小学校・高小卒	17 (4.8)
中学校・女学校卒	82 (23.2)
高等学校・専門学校卒	189 (53.5)
短大・大学卒以上	37 (10.5)
N・A	21 (5.9)
不 明	7 (2.0)
合 計	353 (100.0)

表 4 職 業 ( )%

学 生	41 (11.6)
専 業 主 婦	106 (30.0)
常 勤 ・ 自 営	107 (30.3)
パ ー ト ・ 内 職	56 (15.9)
そ の 他	31 (8.8)
N・A	9 (2.5)
不 明	3 (0.8)
合 計	353 (100.0)

表 5 世帯構成 (%)

単 独 世 帯	6 (1.7)
夫婦・二人世帯	38 (10.8)
三 人 世 帯	46 (13.0)
四～五人世帯	180 (51.0)
六～七人世帯	60 (17.0)
八人以上世帯	9 (2.5)
そ の 他	2 (0.6)
N・A	10 (2.8)
不 明	2 (0.6)
合 計	353 (100.0)

### Ⅲ 調査概要と分析

#### 1. 子を産み育てることの意味

子を産み育てることは、「当然である」43.1%「自分の子が欲しい」21.2%「好きな人の子が欲しい」10.2%の順である。十代の女性や未婚者の女性に「好きな人の子が欲しい」とする割合が他より高くなっている。

子を産み育てることは、一般に結婚を前提にその可否があり、そして産むことのできる夫婦の健康状態の是非、さらには育てる家庭があることなどが要件となり、かならずしも全女性が社会的にこれらの要件を満たす事情にはない。女性であるならば、子を産み育てることが当然であるとする比率が依然高い。こうした意識こそが、育児の責任を女性が主たる担い手であることを自ら表明するものでもあり、夫婦が共に育てると意識の昂揚を難しくさせている。

さらには、一夫婦が持つ子供の数が少ないため、兄弟間の育ち合いの機能が有効に働かず、育児に関わる者の責任を重くしている。また、家庭の中で子どもの社会化が困難なため、子どもが社会化することに対する関心が高くなる。そして、社会化を急ぐあまり、家庭での段階的しつけが軽んじられ、しつけへの関心が高くても実際にはその責任を放棄している状況である。

家庭外に職業を持つ女性の増加は、子を産むという女性の特性が、そのまま育てる特性と結び付けることを由としなくなっている。確かに産み育てることは、切り離せない一連の養育活動ながら、既に育てる行為にみる社会化によって、家庭と社会とですることが可能であると考えられるようになったのである。こうして、育児の社会化の歴史の積み重ねは、親が必ずしも育てなくとも育つという実際を明らかにし、切り離せないはずの一連の養育活動が、「産む」とことと「育てる」ことを非連続性のものとして捉える方向に変化をしている。だが、「子が欲しい」「子が

表 7

子を産み育てることの意味と家庭経済状態

上段 人, 下段 %

	当 然 と し	精 落 た め 的 着 に く	自 供 い 分 が の 欲 子 し	可 求 能 性 を	好 の し き 子 い な が 人 ほ	家 ぎ の 後 継	妊 娠 し た	老 め 後 の た	そ の 他	合 計
非常に安定	7	2	3	2	3	1	1	0	1	20 5.7
普 通	129	4	10	15	27	21	13	4	9	282 79.9
非常に不安定	8	2	7	1	2	3	1	3	2	29 8.2
そ の 他	3	0	0	0	2	0	1	1	1	8 2.3
N・A	5	0	5	0	2	2	0	0	0	14 4.0
合 計	152 43.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

表 8 子を産み育てることの意味と結婚の有無 上段 人, 下段 %

	当然とし	精神落ちたく	自供い分の欲し	可求めて性を	好きがいなほ	家の後継	妊娠した	老後のた	その他	合計
既 婚	106	3	48	9	19	23	16	5	5	234 66.3
未 婚	41	5	24	9	15	4	0	3	8	109 30.9
そ の 他	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1 0.3
N・A	4	0	3	0	2	0	0	0	0	9 2.5
合 計	152 43.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

表 9 子を産み育てることの意味と年齢構成 上段 人, 下段 %

	当然とし	精神落ちたく	自供い分の欲し	可求めて性を	好きがいなほ	家の後継	妊娠した	老後のた	その他	合計
～19歳	11	1	5	3	9	1	1	2	5	38 10.8
20～24歳	26	4	16	7	7	2	1	2	2	67 19.0
25～29歳	13	0	10	2	7	0	0	0	0	32 9.1
30～34歳	24	2	10	2	2	4	2	0	3	49 13.9
35～39歳	15	0	5	2	0	1	3	0	0	26 7.4
40～44歳	20	1	7	0	2	4	1	1	0	37 10.5
45～49歳	23	0	11	2	1	6	3	1	1	48 13.6
50歳～	14	0	8	0	5	7	5	2	1	42 11.9
N・A	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2 0.6
不 明	5	0	3	0	2	2	0	0	0	12 3.4
合 計	152 43.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

産みたい」との積極的意志によって子を儲けても、必ずしも「育てる」行為に繋がらないところに問題が生ずることを忘れてはならない。

## 2. いつ「子を産む」ことについて考えるようになったか。

「子を産む」ことについて考える時期は、「結婚が決った前後から」25.2%「妊娠の前後から」21.8%「現在も全く考えていない」13.0%「好きな人ができた時」12.5%の順であった。学校卒業「以前」「以後」6.8%・6.5%で、低率である。

この結果を見る限りにおいては、「子を産む」こと

表10 「子を産むこと」について考えるようになった時期 ( )%

1 学校卒業以前に	24 (6.8)
2 学校卒業以後に	23 (6.5)
3 好きな人ができた時	44 (12.5)
4 結婚が決った前後から	89 (25.2)
5 結婚をしたいと考える様になった頃	35 (9.9)
6 妊娠の前後	77 (21.8)
7 現在も全く考えていない	46 (13.0)
8 そ の 他	10 (2.8)
N・A	4 (1.1)
不 明	1 (0.3)
合 計	353 (100.0)

は、結婚することや妊娠することや好きな人ができるという現実と直面しないと考えるににくいようである。

ところで、健康な「子を産む」ためには、日頃における健康管理と産み育てる環境の設定が重要である。「子を産む」ことが現実と直面しないと考えられないことであるならば、それに関わる準備が実際に十分になされているともなされていないとも、どちらにも取れる。もしなされていないのであるならば、子どもにとっても母親にとっても、単に健康上の理由だけではなく不幸なことではなからうか。不幸であることに対する事実認識を強めるならば、男女共に「産む性」の理解を深めるための教育を、より早い時期に用意されなければならない。まして、「子を産み育てる」ことを当然と考える女性が多いのであるならば、なおのこと必要である。

### 3. どんな子に育つことを期待しているか

子どもを育てる場合、どんな子どもに育てたいと思っているかをみると、「健康な子」39.4%が他と比し割合が高い。ついで「優しい子」10.2%「人に迷惑をかけない子」9.3%「明るい子」7.1%の順である。これを結婚の有無でみると、既婚者は「健康な子」41.5%「人に迷惑をかけない子」12.0%「明るい子」8.1%「のびのびしている子」「優しい子」であり、未婚者は「健康な子」37.6%「優しい子」18.3%「正直な子」8.3%「そのようなことは考えたことがない」「明るい子」の順である。

なによりも健康な子どもに育てたいと願うのは、人や親の考え方の基本である。健康な体は、健康な心によって築きあげられるはずである。心より体をと望む背景には、激しい競争社会に立ち向かうための課題となっていると思われ、競争社会を前提とする子育ての考え方に多くの問題を投げ掛けるものである。子どもがだんだん年を重ねると、健康だけで他は望まないというより、むしろここでは下位にある「たくましく」「頭のよい子」などと願うようになり、体より心を大切に考える時期が重要になるのではなからうか。

既婚者に「人に迷惑をかけない子」と考える割合が高いが、子どもはいつてみれば大なり小なり人に迷惑

表11 望んでいる子育ての姿と結婚の有無 ( )%

	既婚	未婚	その他	N・A	合計
1 健康な子	97	41	0	3	141 (39.4)
2 優しい子	15	20	0	1	36 (10.2)
3 意欲のある子	12	3	0	0	15 (4.2)
4 たくましい子	9	2	0	0	11 (3.1)
5 明るい子	19	6	0	0	25 (7.1)
6 しんのある子	9	4	0	0	13 (3.7)
7 人に迷惑をかけない子	28	5	0	0	33 (9.3)
8 正直な子	7	9	1	0	17 (4.8)
9 頭のよい子	2	1	0	0	3 (0.8)
10 信念を通す子	3	0	0	1	4 (1.1)
11 よく考えて行動する子	3	1	0	3	7 (2.0)
12 のびのびしている子	16	5	0	0	21 (5.9)
13 そのような事は、考えた事がない	1	7	0	0	8 (2.7)
14 その他	1	1	0	0	2 (0.6)
N・A	1	1	0	0	2 (0.6)
不明	10	4	0	1	15 (4.2)
合計	234 (66.3)	109 (30.9)	1 (0.3)	9 (2.5)	353 (100.0)

表12 子を産み育てる意味と望んでいる子育ての姿 下段 %

	当然とし	精進ため 神々的に	自供い 分が欲 子し	可求 能性 を	好きの しい 人が 人ほ	家ぎ の 後継	妊娠 した	老め 後の た	そ の 他	合 計
健康な子	72	0	30	4	17	7	6	3	2	141 39.9
優しい子	18	2	3	2	7	0	1	2	1	36 10.2
意欲のある 子	6	0	5	0	1	2	1	0	0	15 4.2
たくましい 子	3	1	2	2	0	3	0	0	0	11 3.1
明るい子	10	0	7	0	4	0	3	0	1	25 7.1
しんのある 子	4	2	1	3	0	3	0	0	0	13 3.7
人に迷惑を かけない子	9	0	10	1	2	5	2	2	2	33 9.3
正直な子	8	2	4	1	1	0	1	0	0	17 4.8
順のよい子	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3 0.8
信念を通す 子	0	0	1	0	1	3	0	1	0	4 1.1
よく考えて 行動する子	2	0	0	0	2	1	0	0	2	7 2.0
のびのびし ている子	9	1	6	1	0	2	2	0	0	21 5.9
考えたこと がない	5	0	0	1	0	0	0	0	2	8 2.3
そ の 他	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2 0.6
N · A	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2 0.6
不 明	4	0	5	2	2	0	1	0	1	15 4.2
合 計	152 42.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

をかけつつ成長するのであり、迷惑をかけることより迷惑を掛けたとき、そのことに対して思いやるところがあるかどうかである。核家族化に伴う小市民化の現象が、「人に迷惑をかけない子」を望む気持の現れがここに示されたものといえる。

未婚者に「そのようなことは考えたことがない」とするのもやむおえないことであるが、子どもを育てることを考えることは、自分を見直し同世代のなかにあっても育ち合うための積極の意味をもたらすといえる。子を産み育てることを当然とする女性である

ならば、女性も外で働くことが当りまえの時代になればなるほど、当然未婚の段階から考えていなければ、現実に対処できずその途中で挫折しかねないいくつかの悩みを抱えることになる。その悩みを最小限に止めるためにも、幼年期から育ち合うことの大切さを認識する必要がある。

#### 4. 子どもに対する職業観

子どもに対する養育側の職業観は、「子どもが就きたいと思う職業ならなんでもよい」32.9%「安定している仕事」26.1%「個性や特技を活かせる仕事に就いて欲しい」21.8%となっている。これを年齢別にみると、30代40代の女性が「安定している仕事」よりも「個性や特技を活かせる仕事に就いて欲しい」と願っている。また、子どもを産み育てる意味との関係でみると、「好きな人の子が欲しい」「家の後継ぎ」とする女性に「子どもが就きたいと思う職業ならなんでもよい」という考えより「安定している仕事」と望んでいる。

子どもに対する職業観は、子どもに対して全体的に非常に寛容である。学歴主義・能力主義の現代社会にあって、どれほどの人が「自分の就きたいと思う職業」を選択出来るか疑問があるが、期待としては「子どもが就きたいと思う職業ならなんでもよい」と考えるのは当然の願いである。しかし、職業選択の自由に関する現実の壁の厚さは、表15をみても明らかである。実際として、これに答えるだけの確固たる思いや手応えがないためか、他の質問事項に比べN・Aの割合が圧倒的に高いのである。

また、「子どもが就きたいと思う職業」との願いが、それを広く選択する資質を養う家庭環境や身近かに用意されているかとなると、また問題である。幼児期における就きたい仕事の職種は、時代を反映する職業への希望もでなくはないが、その多くは看護婦・保母・運転手・野球選手など時代を越えた不変のものである。

「安定している仕事」は、客観的にみてもそれと主観的にみても違い、その職に就いてはじめて安定しているものであるかの実感をもつものである。また、「子どもが就きたいと思う職業」や「個性や特技を活かせる仕事」は必ずしも安定であるとは限らないことが多い。子ども

表13 子どもの職業観と年齢構成 下段 %

	19歳	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-49歳	50歳+	不明	N・A	合計
1 子どもが就きたいと思う職業ならなんでもよい	9	26	19	17	9	8	14	10	4	0	116 32.9
2 安定している仕事	12	16	5	13	4	11	12	14	5	0	92 26.1
3 家業の継承をして欲しい	0	0	1	0	1	2	2	3	0	0	9 2.5
4 社会に役立つ仕事に就いて欲しい	0	9	0	2	1	3	6	7	1	1	30 8.5
5 個性や特技を活かせる仕事に就いて欲しい	9	8	3	14	9	11	14	7	1	1	77 21.2
6 社会の最先端に行く仕事	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4 1.1
7 そのようなことは考えたことはない	7	4	2	3	0	1	0	0	0	0	17 4.8
8 その他	0	1	2	0	2	0	0	0	0	0	5 1.4
N・A	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2 0.6
不明	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1 0.3
計	38 10.8	67 19.0	32 9.0	49 13.9	26 7.4	37 10.5	48 13.6	42 11.9	12 3.4	2 0.6	353 100.0

5. 子どもに常々言っていること（親から言われていること）

常々親が子どもに言っていることは、「礼儀に関すること」17.5%「整理・整頓に関すること」14.9%「家事などの手伝いに関すること」14.3%「行儀に関すること」11.7%「人間の生き方に関すること」10.0%「金銭面に関すること」9.8%の順である。これを職業別にみるならば、学生は「家事などの手伝いに関すること」が一位ではあるが、おおよそまんべんなくいわれているようである。専業主婦は、「礼儀に関すること」がもっとも割合が高く、少し下がって「家事などの

表14 子どもを産み育てる意味と子どもに対する職業観 下段 %

	当然として	精ち着くた落め	自分が欲しい子供	可憐性を求	好きがほしい人の子	家の後継ぎ	妊娠した	老後のため	その他	計
子供が就きたいと思う職業	50	1	27	10	10	4	7	4	3	116 32.9
安定している仕事	43	3	16	2	12	10	2	2	2	92 26.1
家業の継承	3	0	2	0	0	3	1	0	0	9 2.5
社会に役立つ仕事	17	1	5	2	2	1	1	0	0	30 8.5
個性や特技を活かせる仕事	30	2	18	2	9	6	5	1	4	77 21.8
最先端の仕事	0	0	2	0	1	1	0	0	0	4 1.1
考えたことがない	5	1	4	1	3	1	0	0	2	17 4.8
その他	3	0	1	0	0	0	0	0	1	5 1.4
N・A	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2 0.6
不明	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1 0.3
計	152 43.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

への寛容さが、様々な人間的経験と現実を直視する中でのことであるならば十分に評価できるが、そうでなければ子どもも育てる側も期待に反することになりかねない。

ところで、情報化の社会は「みんなが……いる」「みんなが……である」からという言葉に弱くなる傾向にあり、个性的人間より利己的人間を産み出している。したがって、个性的な育て方をするには、あまりにも勇気のいる時代である。

の手伝いに関すること」「整理・整頓に関すること」であった。常勤・自営においては、「整理・整頓に関すること」「礼儀に関すること」「言葉使いに関すること」「家事などの手伝いに関すること」などが続いてあげられていた。パート・内職者は、「整理・整頓に関すること」が一位で、「行儀に関すること」「礼儀に関すること」「家事などの手伝いに関すること」が同率であった。また、「何も言われていない」「何も言っていない」が全体として5.8%であるが、学生12.5%に目だつて多い。「金銭面に関するこ

表15 子どもを産み育てる意味と子どもに対する  
職業観の一致の程度

	当然として	精 ち着 くた め	自 分 が 欲 し い 子 供	可 能 性 を 求	好 ま し い 人 の い	家 の 後 継 ぎ	妊 娠 し た	老 後 の た め	そ の 他	合 計
一致した	3	1	1	0	2	1	0	0	3	11 3.1
だいたい一致した	16	3	8	7	2	2	4	5	9	56 15.9
一致していない	2	3	2	2	5	4	2	1	1	22 6.2
わからない	5	1	0	0	1	0	2	0	0	9 2.5
N・A	126	0	64	9	26	20	8	2	0	255 72.2
合 計	152 43.1	8 2.3	75 21.2	18 5.1	36 10.2	27 7.6	16 4.5	8 2.3	13 3.7	353 100.0

表16 子どもに常々言っていること、または親から  
言われていることと職業別

	学 生	専 業 主 婦	常 勤 自 営	パ ー ト ・ 内 職	そ の 他	不 明	N ・ A	合 計
1 何も言っていない	7	10	10	4	0	0	4	36 5.8
2 人間の生きかたに関する こと	3	19	19	10	10	0	1	62 10.0
3 言葉使いに関するこ と	4	12	22	10	6	0	2	56 9.0
4 行儀に関すること	8	21	10	17	13	2	2	73 11.7
5 金銭面に関すること	4	15	17	14	9	1	1	61 9.8
6 礼儀に関すること	9	39	25	17	15	1	3	109 17.5
7 家事などの手伝いに関 すること	10	28	21	17	10	0	3	89 14.3
8 勉強に関すること	7	5	9	9	8	0	1	39 6.3
9 整理・整頓に関する こと	4	27	26	19	12	0	5	93 14.9
10 そ の 他	0	0	2	0	2	0	0	4 0.6
N・A	0	1	0	0	0	0	0	1 0.2
不 明	0	0	0	0	0	0	0	0 0.0
合 計	56 9.0	177 28.4	161 25.8	117 18.8	85 13.6	5 0.8	22 3.5	623 100.0

下段 %

と」「勉強に関すること」が比較的低位にあるのは、親が言わないように努めている事項に入るといえよう。

一般的に、日常生活に関する細々とした面というより、行儀や礼儀のような大まかなことに関して言っているようである。同じ礼儀に入ると思われる「言葉使いに関すること」が、常勤・自営の女性に高位であるのみということから類推するならば、職場などで自分がいわれたこと感じたことをそのままいっているに過ぎず、必ずしも時と場を心得た適切な言葉がけが行なわれていないのではなかろうか。このことは、日常言っていること(言われていること)が、しっかりと守られている割合が6.8%、「少し」「いいえ」が38.5%「だいたい」が50.4%であることからもうかがえる。

行儀や礼儀は、本来よりよい人間関係を作り上げるためであり、またより人間らしく生きるために必要とされることである。形式主義的な関わり方では身につかないばかりか、不自然なあいまいな仕方だけが身につけてしまいかね

ない。行儀や礼儀は、子どもの生活のあらゆるかかわりのなかで、できるだけ自然に無理なく愛情をもってなされてこそ、苦痛なく守れるものである。

物が豊かで溢れる社会になり、子ども自身が持つ物も多くなったことを反映して、「整理・整頓に関すること」への子どもへの期待が増している。身の整理・整頓は、きちんと整えられている喜びを感じなければ、その必要性や切実感をあまり感じないものである。共働き家庭の多くは、どうしても整理・整頓が後回しになりがちで、子どもにこれを習慣づけることが困難であるし、日本の狭い住環境では限界がある。かといって、物を増やさない努力となるとこれまた容易ではない。したがって、人間の生活そのものの見直しをしなければ、簡単に結論を出せない問題である。つまり、人間らしく生きることに對する価値を何処に置くかを考えることである。



表17 日常言っていることの守られているかどうかの有無 ( ) %

1	はい	24 ( 6.8)
2	だいたい	178 ( 50.4)
3	すこし	107 ( 30.3)
4	いいえ	29 ( 8.2)
	N・A	14 ( 4.0)
	不明	1 ( 0.3)
	合計	353 (100.0)

ところで、「家事などの手伝い」をしてもらうためには、まず手伝いをしたいと思う気持ちを喚起させる愛、そして実際に手伝いが出来るようになるまで、そのやり方を教えなければならない。こうした手順を踏まないと、行儀や礼儀と同様に苦痛な仕事に他ならなくなる。苦痛にさせることによって、「しない」・「させない」、 「やらない」・「やらせない」ことに価値をみいだす方向に進まないだろうか。家庭の中で、これまで必要とされたことが「しなくても」「やらなくても」よいというように変化している。子どもの成長にとって、何が大事であるかの大人の判断によって、子どもが良きにつけ悪きにつけ影響を受けることを忘れてはならない。

表18 子育てに対する考え方と、子(親)の行動に関する情報程度

下段 %

	よく知っている	だいたい	余り知らない	関心がない	ないえなもの	N・A	不明	合計
1 健康な子	6	100	9	5	17	2	1	141 39.9
2 優しい子	1	21	4	3	7	0	0	36 10.2
3 意欲のある子	2	10	1	0	2	0	0	15 4.2
4 たくましい子	1	8	0	1	1	0	0	11 3.1
5 明るい子	2	17	2	2	2	0	0	25 7.1
6 しんのある子	1	9	0	1	2	0	0	13 3.7
7 人に迷惑をかけない子	3	26	0	2	1	1	0	33 9.3
8 正直な子	3	8	2	2	1	1	0	17 4.8
9 頭のよい子	0	2	0	0	1	0	0	3 0.8
10 信念を通す子	0	1	0	0	3	0	0	4 1.1
11 よく考えて行動する子	1	5	1	0	0	0	0	7 2.0
12 のびのびしている子	1	11	1	3	5	0	0	21 5.9
13 考えた事がない	0	3	1	1	2	1	0	8 2.3
14 その他	0	1	0	0	0	0	1	2 0.7
N・A	0	1	0	0	0	0	1	2 0.7
不明	2	12	0	0	1	0	0	15 4.2
合計	23 6.5	235 66.6	21 5.9	20 5.7	45 12.7	7 2.0	2 0.6	353 100.0

6. 子ども(または親)の行動についての、親の情報度

子どもあるいは親のことについてどの程度知っているかについては、「だいたい知っている」66.6%、「なんともいえない」12.7%、「非常によく知っている」6.5%、「あまり知らない」5.9%、「関心がない」5.7%となっている。一緒に生活していれば、「だいたい知っている」という認識にたつようである。しかし、

親や子どものことについて知っていることが、親子の相互理解にまで深まらないのはどうしてであろうか。ここに知ってはいても、その対応の仕方が分からなく、なんとなく、あるいはまた、無理をしても一般的な対応の仕方を選んでしまっている親の姿が浮んでくるものである。

子どもの成長は、日々の生活実感から学びとるものであり、ゆとりある家庭生活・職業生活によって手応えのある対応が先ずは必要である。

表 19 幼児・小学生・中学生・高校生・若者・親に関する感じ方

下段 %

	幼 児			小 学 生			中 学 生			高 校 生			若 者			親			合 計		
	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A	は い え	い え え	N ・ A
1 わがまま	229	60	64	247	53	53	232	56	65	213	64	76	190	85	78	112	152	89	1,223	470	425
2 人に頼りすぎ	64.9	17.0	18.1	70.0	15.0	15.0	65.7	15.9	18.4	60.3	18.1	21.5	53.8	24.1	22.1	31.7	43.1	25.2	57.7	22.2	20.1
3 礼儀を知らない	163	85	105	191	68	14	186	69	98	196	77	80	177	98	78	102	151	100	1,015	548	555
4 自主性がない	46.2	24.1	29.7	54.1	19.3	26.6	52.7	19.5	27.8	55.5	15.6	22.7	50.1	27.8	22.1	28.9	42.8	28.3	47.9	25.9	26.2
5 責任感がない	118	124	111	149	108	96	168	94	91	168	107	78	143	128	82	67	189	97	813	750	555
6 けじめがない	33.4	35.1	31.4	42.2	30.6	27.2	47.6	26.6	25.8	47.6	30.3	22.1	40.5	36.3	23.2	19.0	53.5	27.5	38.4	35.4	26.2
7 視野が狭い	133	112	108	146	104	103	166	88	99	170	88	95	156	104	93	91	153	109	862	649	607
8 意欲的でない	37.7	31.7	30.6	41.4	29.5	29.2	47.0	24.9	28.0	48.2	24.9	26.9	44.2	29.5	26.3	25.8	43.3	30.9	40.7	30.6	28.7
9 個性がない	156	70	127	157	85	111	176	69	108	171	85	97	158	88	107	86	165	102	904	562	652
10何を考えているかわからない	44.2	19.8	36.0	44.5	24.1	31.4	49.9	19.5	30.6	48.4	24.1	27.5	44.8	24.9	30.3	24.4	46.7	28.9	42.7	26.5	30.8
11物を大切にしない	145	78	29	189	75	89	181	76	96	172	77	104	164	92	97	73	169	111	924	567	627
12人間性・身体的にもひ弱である	38.2	22.1	36.8	53.5	21.2	25.2	51.3	21.5	27.2	48.7	21.8	29.5	46.5	26.1	27.4	20.7	47.9	31.4	43.6	26.8	29.6
13無駄なお金の使い方をしない	134	87	132	140	91	122	146	91	116	160	86	107	145	106	102	160	106	87	885	567	666
14服装への関心が強い	38.0	24.6	37.4	39.7	25.8	34.6	41.4	25.8	32.9	45.3	24.4	30.3	41.1	30.0	28.9	45.3	30.0	24.6	41.8	26.8	31.4
15T.Vの影響が大きい	100	131	122	119	120	114	160	80	113	171	76	106	167	84	102	108	130	115	825	621	672
合計	28.3	37.1	34.6	33.7	34.0	32.3	45.3	22.7	32.0	48.4	21.5	30.0	47.3	23.8	28.9	30.6	36.8	32.6	39.0	29.3	31.7
	104	137	112	120	111	122	138	103	112	152	89	112	136	116	101	122	115	116	772	671	675
	29.5	38.8	31.7	34.0	31.4	34.6	39.1	29.2	31.7	43.1	25.2	31.7	38.5	32.9	28.6	34.6	32.6	32.9	36.4	31.7	31.9
	111	128	114	134	121	98	192	80	113	199	65	89	185	80	88	104	143	106	925	617	576
	31.4	36.3	32.3	38.0	34.3	27.8	54.4	22.7	32.0	56.4	18.4	25.2	52.4	22.7	24.9	29.5	40.5	30.0	43.7	29.1	27.2
	185	68	100	206	57	90	191	68	94	181	74	98	172	80	101	89	164	100	1,024	511	583
	52.4	19.3	28.3	58.4	16.1	25.5	54.1	19.3	26.6	51.3	21.0	27.8	48.7	22.7	28.6	25.2	46.5	28.3	48.3	24.1	27.5
	147	87	119	170	82	101	175	77	101	167	87	99	151	108	94	79	173	98	889	614	615
	41.6	24.6	33.7	48.2	23.2	28.6	49.6	21.8	28.6	47.3	24.6	28.1	42.8	30.6	26.6	22.4	49.0	27.8	42.0	29.0	29.0
	91	145	117	152	99	102	184	75	94	189	73	91	176	84	93	82	173	98	874	649	595
	25.8	41.1	33.1	43.1	28.0	28.9	52.1	21.2	26.6	53.5	20.7	25.8	49.9	23.8	26.3	23.2	49.0	27.8	41.3	30.6	28.1
	101	140	112	147	104	102	232	49	72	253	35	65	248	44	61	138	125	90	1,119	497	502
	28.6	39.7	31.7	41.6	29.5	28.9	65.7	13.9	20.4	71.7	9.9	18.4	70.3	12.5	17.3	39.1	35.4	25.5	52.8	23.5	23.7
	251	29	73	276	19	58	251	44	58	249	28	76	236	43	74	155	105	93	1,418	268	432
	71.1	8.2	20.7	78.2	5.4	16.4	71.1	12.5	16.4	70.5	7.9	21.5	66.9	12.2	20.9	43.9	29.7	26.3	66.9	12.7	20.4
	2,168	1,481	1,545	2,543	1,297	1,375	2,778	1,119	1,430	2,811	1,111	1,373	2,604	1,340	1,351	1,568	2,213	1,511	14,472	8,561	8,737
	41.8	28.5	29.8	48.8	24.9	26.4	52.1	21.0	26.8	53.1	21.0	25.3	49.2	25.3	25.5	29.6	41.8	28.6	45.6	26.9	27.5

## 7. まわりの子どもや親をみての感じ方

全体としての感じ方は、肯定するものとして「テレビの影響が大きい」66.9%、「わがまま」57.7%、「服装への関心が強い」52.8%、「物を大切にしない」48.3%、「人に頼りすぎる」47.9%、否定するものとして「礼儀を知らない」35.4%、「個性がない」31.7%、「自主性がない」30.6%、「無駄なお金の使いかたをする」30.6%、「意欲的でない」29.3%である。

幼児に関するもので、肯定するものとして「テレビの影響が大きい」71.7%、「わがまま」64.9%、「物を大切にしない」52.4%、「人に頼りすぎる」46.2%、「責任感がない」44.2%、否定するものとして「無駄なお金の使いかたをする」41.1%、「服装への関心が強い」39.7%、「個性がない」38.8%、「意欲的でない」37.1%、「何を考えているかわからない」36.3%である。

小学生に関するもので、肯定するものとして「テレビの影響が大きい」78.2%、「わがまま」70.0%、「物を大切にしない」58.4%、「人に頼りすぎる」54.1%、「けじめがない」53.5%、否定するものとして「何を考えているかわからない」34.3%、「意欲的でない」34.0%、「個性がない」31.4%、「礼儀を知らない」30.6%、「自主性がない」「服装への関心が強い」29.5%である。

中学生に関するもので、肯定するものとして「テレビの影響が大きい」71.1%、「わがまま」「服装への関心が強い」65.7%、「何を考えているかわからない」54.4%、「物を大切にしない」54.1%、否定するものとして「個性がない」29.2%、「礼儀を知らない」26.6%、「視野が狭い」25.8%、「自主性がない」24.9%である。

高校生に関するもので、肯定するものとして「服装への関心が強い」71.7%、「テレビの影響が大きい」70.5%、「わがまま」60.3%、「何を考えているかわからない」56.4%、「人に頼りすぎる」55.5%、否定するものとして「礼儀を知らない」30.3%、「個性がない」25.2%、「自主性がない」24.9%、「人間性・身体的にもひ弱である」24.6%、「視野が狭い」24.4%である。

若者に関するもので、肯定するものとして「服装への関心が強い」70.3%、「テレビの影響が大きい」66.9%、「わがまま」53.8%、「何を考えているかわからない」52.4%、「人に頼りすぎる」50.1%、否定するものとして「礼儀を知らない」36.3%、「個性がない」32.9%、「人間性・身体的にもひ弱である」30.6%、「視野が狭い」30.0%、「自主性がない」29.5%である。

親に関するもので肯定するものとして「視野が狭い」45.3%、「テレビの影響が大きい」43.9%、「服装への関心が強い」39.1%、「個性がない」34.6%、「わがまま」57.7%、否定するものとして「礼儀を知らない」53.5%、「人間性・身体的にもひ弱である」「無駄なお金の使いかたをする」49.0%、「けじめがない」47.9%である。

全般的に「はい」とする肯定の割合が高く、「いいえ」とする否定の割合が低い、親のみはその逆である。親は、視野が狭いが人間的にも身体的にも強く、お金にもきちんとしているといった特徴を有していると感じられている。親子の立場の違いが、この結果から明らかにされたものといえ、視野の狭さを指摘されるのは、自分の子ども中心に関心が向いていることを伺うものである。完成された大人の人格は、子どもを育てる中ではじめて養われるようである。それだけ、子と共に育つという認識を強める必要がある。

幼児から若者まで、テレビの影響が大きく、概してわがままであるとみられているが、個性的であるとする見方もある。テレビは、画一的なメディアであるといわれるが、テレビの影響が大きいにも拘らず個性的であるとするならば、一体その個性はどのようにして身についたものであろうか。わがままであることと個性的であることとは、表裏一体の関係にある。「人に頼りすぎる」という依存的傾向があることも否定できないし、「けじめがない」とも取られているので、個性的であるとするよりも、むしろわがままの部類に傾いているようである。ただ、意欲的

であるという評価を汲み入れるならば、より個性的であろうとする努力に対する評価とそれを理解することができる。

また、中学生から親に至るまで、服装への関心が強い傾向にあり、礼儀をわきまえているとされている。服装の自由化は、礼儀の簡素化・略式化をもたらし、夫々が認め合うことができるほどにまでに自由化が進行しているということであろうか。一見礼儀をわきまえない社会のようだが、身近の付き合いの範囲においてはそれなりに相手を認めることができる関係を構成しているためか、世論とは反対の結果になっている。

幼児や小学生は、とくに物を大切にしなくなった時代といわれており、まさに量産・消費時代の申し子のような彼らである。物の希少価値や物の衰れを経験することのない世代に、物の大切さを教えることは実に難しいが、限りある資源を有効に利用する手段を伝えることは重要である。

一般に、小学生はまだ何を考えているかわかるが、中学生になると途端に何を考えているかわからないと思われている。心身共に大人への脱皮の時期であり、新しい一つの人格の独立と発達過程であり、周囲にあっては付かず離れず見守って欲しいと願っての寡黙といえる。したがって、この時期の過干渉は、子どもの独立を妨げるものであるが、伝えるべきは伝えて行く責任を回避すべきではない。

こうして全体を概観するならば、私達がまわりを見る目は、とかく主観的であり自己中心的性格が強く、客観的見方とのズレが大きい。子育ての過程での期待と現実、感じるものと事実との遊離を招く原因にもなっているため、柔軟な考えを持つゆとりが必要である。

#### Ⅳ お わ り に

以上、子育ての意識と実態についてみてきたが、社会状況だけでなく子どもに関しても認識が甘く、将来への明確な展望を持たないで、現状の流れのままに「やれない」から「仕方がない」、この程度なら「十分」であるといった方向で子育てがなされているのが明らかにされたのではなからうか。

家庭でのしつけを重んじながら、また子どもの可能性を信じながら子育てをしても、一般的な子どもの傾向を各種のマスメディアなどから知って、熟知してはいるけれども、自分の子どもになると、その仕方がわからないまま、口で手本を示すしかできない家庭環境に変化していることに気づいていない。

一生懸命、親や大人が外で働く姿があっても、家庭生活の細々した温かな営みがなければ、子どもにとって親とか家庭とかが何であるかわからない。いずれ、大人になれば理解できるものであっても、乳幼児からの積み重ねによって学びとり、習慣化させることが望ましい行動様式も必ずやあるはずである。

男女共に外で働くことによって、家庭が疎かになりがちである。家庭も仕事も可能であるための社会的施策が必要である。家庭は、社会の変化を直接的にも間接的にもその影響を受けながら、それでもなお、家庭という枠を家族という人間関係を築いていく自然な要求の中で生活をしているのである。この自然な欲求に応じてこそ、よりよい子育てがある。

家庭は、実際その場で様々な営みがあってこそ、人間が生活する器として活かされるものであり、育ちあう基盤がまさにそこに込められているのではなからうか。

#### 参 考 文 献

- 小此木啓吾『家庭のない家族の時代』ABC出版、1983